
刹那の風はどこ？

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の風はどこ？

【Nコード】

N9760Y

【作者名】

ごはんライス

【あらすじ】

バンドオンザラン形式。4000字設定。改稿はまだ。

死んじまいたいほどの怒りや苦しみ。長渕の歌みたいだな。
いやなヤツが多いな。誰とは言わぬが、いやなヤツが多い。
何とかならんかな。殺していいという法律があれば殺してるが、
ないし。

こういう時ほど、フィクションが助かる。

デスノートはちびっこの教育に悪いとされているが、オレはちび
っこの犯罪を減らしてるような気がする（気がするってのは読んだ
ことがないので推測）

リアルな生活で、殺したいやつがいても、デスノートを読んで発
散させ、実際には殺さない。これは素晴らしいことだ。

マンガを真似して実際に殺しちゃうつうつもいるから、何でも
アリじゃないけど、それでもそういうヤツはまれだからな。

デスノートまでひどくないが、下着泥棒もひどいはひどい。

武山たけやは、下着泥棒だった。同級生のロリ華の下着を盗む。

ロリ華が寝てる間にロリ華の部屋に勝手に侵入し、タンスからブラ
やパンツを盗んでいくのだ。

「たけちゃん。もう盗むのやめて」

「そういうわけにもいかん」

「な、なぜ」

「男のロマンだからだ」

わけがわからん……。

ちなみに、たけやの兄、たけよしは、アルバイトだった。もう3
5歳である。下着泥棒とは違った意味で人生をギャンブルにかけて
る。

すばる文学賞に落選した。

ざああああああああああああああああ。

しかも、童貞である。

生きてる意味がわからない。
生きてる意味がわからない。
生きてる意味がわからない。

陰鬱……。

「わああああああああああああああああああ」
働いても働いても働いても結婚できない。いたいオレは何をや
ってんだろう……。

何のために社会貢献してるんだろう。さっぱりわからない。

ざああああああああああ。

踏まれて蹴られて、人々に尽くす。意味がない。無意味だ。そんなことしても何も意味がない……。

地獄。

ざああああああああああああああああああ。

たけよし、子供の頃は小説をほとんど読まなかった。覚えてるのはわずかにズッコケ三人組シリーズと星新一と赤川次郎の「女社長に乾杯!」。教科書の小説は全然覚えてない。小説じゃないけど、活字では「ビートルズ・レコーディング・セッション」を繰り返し繰り返し読んだ。これは字が小さくてびっちり書かれてて、ごつつぶ厚いから、単に読むだけだしんどい。しかし、たけよしは、これを読みながら、作詞作曲演奏録音してたので苦にならなかった。レコのヒントがたくさん隠されてたのだ。詩でいうと、萩原朔太郎が好きだった。小説を書いている今は、笑ってはいけないシリーズを繰り返し繰り返し読む。小さい頃に、ダウンタウンの番組をたくさん観てたことの流れ。

小さい頃は、絵本、マンガや音楽、映画、テレビ、お笑い、絵画、詩を楽しんだ。

大人になってからは、筒井康隆を読みまくった。長編で読んでないのはまだあるけど、短編はほとんど読んだ。貪るように読んだ。引きこもりの時は映画を大量に観た。

なぜ小説や評論を成人してからたくさん読み始めたかといえば、

成人して再びマンガを描き始めたとき、ネタ集めのために読み始めた。あるいは大学時代の専門的な学問の流れか。マンガを本格的に描くには物語の構造をきちんと研究せんといかな、知識がたくさんいるなと思い、勉強のために小説や評論を読み始めた。

成人してから、マンガは主に小林よしのり。音楽は奥田民生。評論は井沢元彦。テレビはほとんど観てない。

ざあああああああ。

雨は降り続けた。まさしは傘をさしてずっと彼女を待っている。

ケータイが鳴った。「まさしさん。華子が。華子が」

華子がトラックにはねられて重態らしい。「こうしちゃおれん！」

まさしは頭にタケコプターをつけて、飛び立った。

ざあああああああ。

まさしは華子が死んでから、仕事でミスばかりするようになった。

「まさしくん。きみのささいなミスが原因で50名ほどの尊い命が犠牲になった。今度ミスしたら解雇だよ?」「ごめんなさい……」

まさしは居酒屋でぐでんぐでんに酔っぱらった。大将の髪をひつつかんで、大将の顔を壁にがんがん打ち付ける。大将は大量の鼻血を出し、床にぶっ倒れてしまった。

まさしは踏切の前に立つ。

電車が通り過ぎる。

まさしは、死んでる場合じゃないと思う。

うおおお生きるぞおおと叫び、両手を天に突き上げ走ったら、酔っぱらいのトラックにはねられた。アスファルトに叩きつけられ、即死だった。

雨が降った。

ざあああああああ。

まさしの弟、まさよしは頭痛かった。多額の借金を抱えていた。踏み切りの前に立つ。

「もうだめだ。死ぬしかない……」まさよしは電車に飛び込んだ。まさよしの勤務していた塾の生徒、みつよしは、悩んでいた。

「塾。潰れるかもしれないのか……」

塾が閉鎖するかもしれないという噂を聞いている。みつよしは小学生のときから、もう五年も通ってるので、悲しい。しかし、ライバル塾が増え、生徒数が激減し、経営が悪化していたのだ。

みつよしは、悲しくて悲しくて、先生に冗談じゃないよと怒鳴ってしまった。

「仕方ない。これもご時世。ともかく、オレは最後の日までがんばります」

先生の肩が震えていた。みつよしも、涙があふれて止まらなかった。

ざああああああああああ。

みつよしの通う塾は、本社に正社員を置き、現場では、室長（契約社員あるいは正社員）と、多数のアルバイト講師で回っていた。全国に800校以上ある。

結婚できない社会人講師がたくさんいる。

日本に未来はあるのか。日本に夜明けは来るのか。

このままもう終わりなのか。

月収36万円。行き付けのビデオボックスの本社勤務がそれくらい。たぶん成果主義なんで多少の変動はあるかもわからん。

時給750円のアルバイトだと、フルタイムで週に5日働いて、12万円。厚生年金を引くと、100800円。これは冗談ではなく真面目にそう。

本当に怖い。ひざを抱えて、がたがた震える。絶望。ノーフューチャー。生きてる意味がわからない。

「うわああああああああああ」
素っ裸で走る。

後ろからパトカーが走ってきて、隣で「止まりなさい止まりなさい」とスピークで言う。

オレは無視する。走らないと、自殺してしまう。

しかし、なおも警察がやかましいので、オレは、金属バットで、

パトカーの前のガラスんとことを思い切り叩いた。パトカーはガードレールに突っ込んで、炎上した。

オレは走る、走る、走る。

しかし、よく考えたら、もう11月である。素っ裸は寒い。

ちょうど、民家に、ブラとパンティがほしてあったので、もらった。

しかし、正直、まだ寒い。

ブラとパンティ姿のオレは、行く当てもなく、ひたすら走る。

どうも自己責任のようである。十年も勤務してりや、自然に雇用責任が派生すると考えていたオレが甘かった。どうもそうならない。どこまで行っても自己責任のようである。

「うわあああああああ」

オレは狂って、コンビ二に爆弾を投げた。

どおおおおおおおおおん。

悲鳴が聞こえる。コンビ二は大炎上した。

オレは悲しくて悲しくてならない。その後、警察に捕まり、朝まで説教をくらった。

月収36万……あと、どうしても、24万足りない……。

24万をいっただうすればいいのか。

イライラする。正社員つうのは真面目にイラつく。

オレたちアルバイトをバカにしゃがって。こけにしゃがって。

祭川河太郎もまたアルバイトで、双葉公園にあるテントの中で、タバコをすいながら小説を書いていた。

河太郎は、悔しい。正社員どもに利益を奪われっぱなしだ。働いても働いてもホームレスから脱出できねえ。

河太郎は真面目に正社員をぶっ殺してやろうかなと考える。無論、殺人は違法行為である。しかし、いいかげんにしないと、アルバイトはいつまで経っても貧困に苦しまないといけない。

河太郎はイライラしながら、包丁を宙に振り回した。「正社員ぶっ殺す！正社員ぶっ殺す！正社員ぶっ殺す！」河太郎は、テントを

出て、双葉公園を出た。もう頭にきた。正社員を許すことができない。

これ以上、貧富の差を許すことができねえ。我慢にも限界がある。河太郎は、正社員の豪邸の前に来た。包丁でぶっ刺してやる。目が血走っていた。

ぴんぽーん。

正社員がドアを開いた。

「てめえ。よくも今まで散々オレたちアルバイトから利益を奪いやがったな。許せねえ」

「バカを言っちゃいけない。いつ私が奪った」

「バカをぬかすな。正社員もアルバイトも仕事量が同じだろう。なのに所得に開きがある。おかしいとは思わんのか」

「思う。しかし、そういう社会システムなんだから仕方ないだろう。我慢して貧困に耐えろ。アルバイト」

「うるせえ！」

河太郎は、包丁で、正社員の胸を刺した。「うぎゃあああああああ」血が噴き出る。何回も何回も執拗に刺した。ついには、ぶっ倒れてしまった。河太郎は、正社員の頭を踏んづけた。「足が汚れるぜ。くそ正社員め」

河太郎は、正社員の豪邸に火をつけた。たちまち燃え上がった。それを見ながら、河太郎はげらげら笑った。ざまあ見る。今までオレたちを散々苦しめた報いだ。地獄で反省をしる。河太郎はつばをはいて、その場を去った。

後日、正社員が一人死んだので人件費が浮き、アルバイトの時給が増えた。河太郎はさらに正社員を殺そうと計画している。とにかく早く貧困から脱出せねばならない。犯罪者どもを地獄に落とすのだ！

河太郎は刑務所に入った。

刑務所での生活は過酷だった。朝七時に工場へ行き、夜の十二時に部屋に帰ってくる。

「もう死んでしまおうかな……」

河太郎は、作業中、回転する機械に、吸い込まれるように突進していった。

河太郎は巻き込まれた。「うぎゃああああああ」腕が一本ちぎれて、吹っ飛んだ。

ざああああああああ。

「ああああああああああ。」

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9760y/>

刹那の風はどこ？

2011年11月29日14時48分発行